

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：12603
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520420
 研究課題名(和文)ヌートカ語における複統合性の多面的研究

研究課題名(英文) Study on polysynthesis in Nuuchahnulth

研究代表者

中山 俊秀 (Nakayama, Toshihide)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：70334448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ヌートカ語特有の語彙的接尾辞の意味と機能を幅広く捉えるとともに、この通言語的に比較的珍しいタイプの複統合構造の詳細な分析を通して、複統合性の構造的多様性の幅を明らかにすることができた。また、複統合的語形成の組み立て、内部構造ばかりではなく、自然談話中での複統合的語の分布を分析し、談話中での情報構造の制御に複統合的語形成がどのような機能的役割を負っているのかについても重要な知見を得ることができた。この成果は、複統合性を単に語形成法上の問題・特徴として捉えるのではなく、文形成、談話形成をも含めたより広い範囲の文法体系のなかに位置づける上で重要である。

研究成果の概要(英文)：The goal of this project was to examine the nature of morphological complexity in Nuuchahnulth (Wakashan: British Columbia, Canada) in hope of making contribution to understanding of the diversity of polysynthesis. As made clear in some recent studies, there is a great degree of variation among 'polysynthetic languages' in terms of the kind and degree of morphological complexity. Nuuchahnulth represents a rather unusual type that relies almost exclusively on affixation of suffixes with rich semantic contents (lexical suffixes). In this project, polysynthesis in Nuuchahnulth was examined in detail, using databases of natural discourse data and lexicon, from two perspectives: (1) the range of combination and configuration (both structural and semantic) of lexical suffixes that is allowed in a word; (2) distribution and functions of polysynthetic words in discourse.

研究分野：言語学、ヌートカ語、類型論、形態統語論、用法基盤言語学

キーワード：複統合性 形態論 ヌートカ語 危機言語 類型論

1. 研究開始当初の背景

複統合的語形成では、語レベルの構造の中に複数の語彙的な意味を持った形態素が盛り込まれるために、述語の意味特性や文の主語・目的語などの組合せ特性(項構造)など文形成のあり方にも大きな影響を与える。したがって、複統合性の問題は、伝統的な語形成(形態法)と文形成(統語法)という領域区分で切り分けられず、従来の形態法・統語法の区別や、さらに人間言語の文法枠組み(普遍文法)全体の構成などを考える上でも、重要な理論的示唆に富む。

これまでの研究では、複統合性について、語形成法に基づく言語類型の一つとして認識されていたものの、もっぱら欧米諸言語の語形成との対比の中でその奇異性が指摘されるにとどまる。例外的に、エスキモー語やモーホーク語(イロコイ語族)などに関しては理論的研究も一部なされてきたが、そこで扱われてきたのは通言語的に多様な複統合的語形成のごく一部に過ぎない。これまでに研究代表者が参画した共同研究(北米および古アジア地域の複統合的言語の語形成手法を比較対照)において、複統合性には言語間の差異にかなりの幅と深さが観察され、その特性は容易に一つにまとめることはできないことが明白であった。

また、これまでは、複統合性は語形成タイプの問題としてのみ論じられ、複統合的語形成が実際の言語表現の中でどのように使われるのかについては研究が非常に限られていた。しかし、談話資料の中で見ると、ありとあらゆる語が複統合的に形成されているわけではなく、複統合的な語は比較的限定された分布をもち、選択的に使われている。つまり、複統合的語形成の分布と機能はこれまで見過ごされてきた重要な研究課題である。

2. 研究の目的

本研究では、これまで報告されてきたものとは異なった複統合性を見せるヌートカ語における複統合的語形成を以下のような観点から多面的に調査・分析する：

- ・語内部の構造(どのような形態素がどのように組み合わせられるか)
- ・機能(どのような意味・構造的な関係にある要素が一語の中で組み合わせられるか)
- ・自然談話の中での使用のあり方(談話の中でどのような位置・文脈に現れ、どのような談話構成上の役割を負うか)

こうした分析を通して、一言語の中で複統合的語形成が文法構造全体にどのような影響を与えるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究を進める上で重要な基盤となるのは研究代表者・分担者がこれまでに収集・分

析・資源化してきたヌートカ語の自然談話資料、文データ、語彙である。用例は基本的に談話資料から抽出し、構造特性および意味機能特性情報を付加したデータベースとしてまとめ、さまざまな角度からの検索、分類ができるようにした。データベースは、(i) 複統合的語形成データベース(語彙的接尾辞の組み合わせ-語彙的接尾辞と語根の組合せ；語彙的接尾辞の同士の共起関係-および用法に関するものと、(ii) 複統合的な語の用法(統語的・語用論的用法)データベース(複統合的な語が実際の言語使用の中で負う統語機能-文の主語・目的語；述語；主節・従属節など-および語用論・談話的機能に関するもの)から構成される。

4. 研究成果

複統合的な言語の多くは複数の語根を組み合わせる複合を主たる語形成法として用いるが、ヌートカ語はもっぱら接尾辞を用いた手法を用いて複統合性を実現している。本研究では、ヌートカ語特有の語彙的接尾辞の意味と機能を幅広く捉えるとともに、この通言語的に比較的珍しいタイプの複統合構造の詳細な分析を通して、複統合性の構造的多様性の幅を明らかにすることができた。

また、本研究では、複統合的語形成の組み立て、内部構造ばかりではなく、自然談話の中での複統合的語の分布を分析し、談話の中での情報構造の制御に複統合的語形成がどのような機能的役割を負っているのかについても重要な知見を得ることができた。この成果は、複統合性を単に語形成法上の問題・特徴として捉えるのではなく、文形成、談話形成をも含めたより広い範囲の文法体系のなかに位置づける上で重要である。

これらの研究成果の中核的部分は、複統合性に関する国際シンポジウムにおける発表および国際的論集に含まれる論文としてまとめた他、「語」という形態統語的単位の通言語的な性格付けに関する理論的問題に関連づけた問題提起としてさまざまな場で発表を行った。

以上の研究活動により、本研究の当初に計画されていた、複統合的語形成を、構造、機能、自然談話の中での使用のあり方について多面的に調査・研究し、一言語の中で複統合的語形成が文法構造全体にどのような影響を与えるのかを明らかにするという目的は十分に果たされ、将来的な通言語的比較研究の基盤を構築することもできた。

また、ヌートカ語は流ちょうな話者が100人にも満たない典型的な消滅の危機に瀕した言語(危機言語)である。本研究では複統合的語形成に関して高度に理論的な研究を主たる目的としたが、プロジェクトにおける研究過程で構築された語彙的接尾辞の用法や複統合的語の談話機能に関するデータベースは言語の記録と再活性化のための諸

活動に有用なリソースとなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Toshihide Nakayama. "Polysynthesis in Nuuchahnulth, a Wakashan language." In: Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans (eds.), Handbook of Polysynthesis. Oxford University Press. 印刷中.

中山俊秀.「負ける体験としてのフィールドワーク」西井涼子編『人はみなフィールドワーカーである:人文学のフィールドワークのすすめ』東京外国語大学出版会. pp.36-55. 2014.

Toshihide Nakayama. "Nuuchahnulth (Nootka)." In: Genetti, Carol, How Languages Work, Cambridge, Cambridge University Press. pp.441-462. 2014.

[学会発表](計 22 件)

中山俊秀.「言語構造の柔らかさはどこからくるか:「語」というドメインを中心に」学術交流研究シンポジウム「やりとりの言語学 場から生まれることば」日本女子大学. 2015.3.26. 2015.

Toshihide Nakayama and Kumiko Nakayama. "Toward an Organic View of Unit." Helsinki Symposium on Matches and Mismatches of Units in Interaction. University of Helsinki. 2014.9.11-12. 2014.

Toshihide Nakayama. "An exploration of grammatical tightness: some observations from Nuuchahnulth narrative data" International Workshop on Tight and Loose Grammar. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2014.11.29-30. 2014.

中山俊秀.「言語使用の中で文法を考えるー言語の構造的単位に注目してー」九州大学言語学研究会. 九州大学. 2014.10.10. 2014.

中山俊秀.「文法とコミュニケーションの怪しい体系性-ありのままの言語研究の挑戦」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所AA研創立50周年記念シンポジウム. 一橋講堂(東京都千代田区). 2014.

2014.10.24.

Toshihide Nakayama. "Rethinking the notion of 'units' in linguistic description and theory." Workshop on Intransitivizing Morphology in Japanese Dialects. 九州大学. 2014.10.11. 2014.

Toshihide Nakayama and Tsuyoshi Ono. "Toward Understanding Grammar through Conversation" Annual Meeting of the Linguistic Society of America, Tutorial: Documenting Conversation, Linguistic Society of America, Minneapolis, MN, USA. 2014.1.2. 2014.

Toshihide Nakayama. "The role of polysynthesis in Nuuchahnulth morphosyntactic structure" International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages, 国立国語研究所. 2014.2.20. 2014.

中山俊秀.「危機言語時代の言語調査 なにをどのように記録すべきか(招待講演)」国立国語研究所 時空間変異研究系 合同研究発表会. 国立国語研究所. 2014.3.21. 2014.

Toshihide Nakayama. "Problems of 'units' in describing Nuuchahnulth syntax" International Workshop on Linguistic and Interactional Units in Everyday Speech: Cross-Linguistic Perspective. University of Alberta. 2013.6.21. 2013.

Toshihide Nakayama. "Issues on 'units' in language communication and linguistic structure." Workshop on Grammar in Spoken Discourse. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2012.11.18. 2012.

中山俊秀.「生きている言語を捉える挑戦:言語研究のパラダイム転換に向けて」国立大学共同利用・共同研究拠点協議会第9回知の拠点セミナー. 京都大学東京オフィス. 2012.6.14. 2012.

[図書](計 2 件)

Toshihide Nakayama and Keren RiceThe Art and Practice of Grammar Writing. Language Documentation and Conservation Special Publication 8. University of Hawai'i Press. 157pp. 2014. (共編; 著作のうち執筆部分 pp.1-5)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

中山 俊秀 (Toshihide Nakayama)
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所・教授
研究者番号：70334448

(2)研究分担者

中山 久美子 (Kumiko Nakayama)
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所・研究員
研究者番号：40401426